

おとしだまの森倶楽部について

2009年9月6日、葛木御歳神社の奥山を整備するために、「おとしだまの森倶楽部」が発足しました。

葛木御歳神社は弥生の昔から稲の神様が祀られ、その神饌がお年玉の起源にもなった神社です。

「おとしだまの森倶楽部」は、その大切な鎮守の森を整備し、後世に引き継いで行くことを目的としています。

(おとしだまの森倶楽部 設立趣意書)

昔、里山と人とは近い関係でした。稲作の始まりには、「さなぶり」と言って山の神をお迎えに里山に登りました。山の神は、田の神となって、農耕を守って下さいました。70歳代以上の方は、御歳神社の奥に広がる奥山へ、「さなぶり」に参った記憶をお持ちの方もいます。

昔の山越えの道は、尾根筋の道でした。分水嶺でもある山の頂上には、水をもたらす神様を祭っていました。山を越える人々は、その神様の祠に幣帛の布を供えながら山を越えて行ったといえます。

神様事だけではなく、薪にする柴を取りに里山へ行くのは子どもの仕事でした。田畑の肥料は、山の落ち葉の腐葉土をもらい受けました。

人々の暮らしの身近にあった里山が、今、使われなくなり、荒れています。

農耕の神様を祭る葛木御歳神社の奥山も例外ではありません。

科学が進んだとはいえ、山を荒れたままにして置くのは、色々な弊害をもたらします。植林された木々は枝うちも間伐もしなくなったまま暗い森となり、下草は十分に育たず、肥沃な土壌だった山は、痩せて水害をもたらすものになってしまっています。

山を整えたい。

その思いを形にするべく、ここに「おとしだまの森倶楽部」を設立いたします。「おとしだまの森」の名称は、葛木御歳神社が年神さまとして、お年玉に関係の深い神様であることから名付けました。まずは、御歳神社奥に広がる奥山の尾根筋の整備から始めたいと思います。朽ちた木々を間伐整理して、土壌に適度な光が入り、保水力を持つ健全な森に育てることを目的とします。鎮守の森にふさわしい景観の回復を図ります。また、竹林を整え、昔の山道の整備をして、磐座までの登拝路を整えたいと思います。

古代から歴史の重要な拠点であったここ葛城から、鎮守の森のこれからのあるべき姿を皆様とともに考え、実現、発信していくため、皆様の参画をお待ちしています。

お問い合わせ先：奈良県御所市東持田269番地 葛木御歳神社

mitoshi7@mail.goo.ne.jp 東川（うのかわ）

(葛木御歳神社公式ホームページ <http://www.mitoshijinja.com/>より [おとしだまの森倶楽部](#) をクリック)

おとしだまの森倶楽部の活動のご紹介

1. 鎮守の森の保護活動

神社後背のご神体山(御歳山)は、太古より神の森として守られ、シイの高木を中心とした美しい照葉樹林を形成しています。

周囲は戦後植栽され、その後手入れされず放置された桧林と、時代の流れとともに利用されなくなった竹林に囲まれています。

鎮守の森の遠景



御歳山の照葉樹林



おとしだまの森倶楽部では、この美しい鎮守の森を後世に伝えるため、周辺林の保全活動を行っています。

鬱蒼とした人工林



桧の間伐作業



桧・竹の間伐を行い、鎮守の森に流れる光・水・空気を調整し、この先もずっとずっと美しく豊かな森であり続けますようお願いしています。

2. 文化の継承

ヤマトのクニが興るころ、この葛城の地では、水の祭祀が行われていたそうです。その遺構が近くで発掘されたのですが、それは山から流れ出る水を段違いの樋で通し、浄水していたそうです。

おとしだまの森倶楽部では、間伐した孟宗竹を利用して樋を作り、神社の手水舎に奥山から流れ出る水を通しました。

間伐した竹をくりぬいて樋を作ります



棟梁、気合が入ってます



開通～



先達の知恵と工夫を受け継いで、里山にある豊かな資源を利用した文化を継承していくことを目指します。

3. 奥山登拝路の整備

最古の神社の形態は、ご神体山と、その周囲を扇状の山に囲まれたところに神様をお祀りしていたそうです。ここ御歳神社にも、御歳山を囲むように、扇状の奥山が広がっています。春にはツツジやヤマザクラが咲きほこり、秋は紅葉を楽しむことができ、近くは西に金剛・葛城を仰ぎ、はるか東には、吉野・大峰・台高の峰々を望むことができる神坐まします里山です。

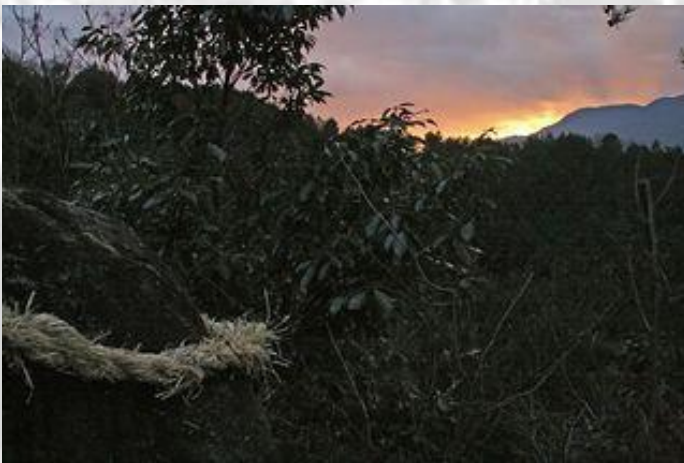
春・咲きほこるヤマツツジ



雪の金剛山を望む



山の磐坐に日は落ちて・・・



薄霧の登拝路



おとしだまの森倶楽部では、この奥山の道を登拝路として整備し、自然に親しむ観察会やイベントの開催を計画しています。

「おとしだまの森情報」ブログより

<http://mitose-forest.blog.so-net.ne.jp/>

森の状態

御歳山は古来より神坐す山として人の手が入らず守り続けられ、シイの高木層を中心とした極相の照陽樹林を形成しています。

これほどの広さ(約 1ha)でクライマックスに達している森は、知る限り県内でもほとんど残されていないのではないかな?と思います。

おそらく葛城の太古の森は、このような森に覆われており、その森に貯えられた水は大和平野に流れ、農耕を助け、ヤマトのクニを発展せしめたんだろうと思います。

近くで水の祭りをしていた遺構も見つかっておりますし、日本の歴史の鍵を握る森といっても過言ではないでしょう。

ただ、南と北に竹林が広がっているのと、山域にシカの生息が認められ、森の保護のために今後なんらかの対策が必要になってくるかも知れません。周辺の植性や土壌、湿度、日照など、影響をきちんと調査して保護活動をしていかなければいけないな。と感じています。

奥山に向かう道は樹齢約 50 年程度のヒノキの人工林。

間伐がされておらず、伐った木の年輪を見ると、植林後 20 年ほどで日光が当たらなくなったようで、年輪の目がぎっしり詰まり、直径は 20 センチ程しかありません。

樹高はシイの御神木に合わせたかのように 20 数メートルあり、立ち枯れている木も目立ちます。

適切な間伐と下層植性の育林で御歳山の森に連なる鎮守の杜としての機能をなんとか再生して、森に溶け込もうとしている古木に繋がる次の世代を今、育てなくてはなりません。

奥山の尾根道は雑木の二次林。コナラやツツジなど落葉樹が中心で、松やヒノキなどの針葉樹が混成しています。こちらはもと松林だったらしいのですが、50 年ほど前の写真を見ると皆伐されおり、そこから森が再生している途上であるようで、陽樹がたくさん育っています。また、日当たりのよいところでは、松やヒノキの実生を見ることができ、学ぶことがたくさんある森です。

磐坐もあり、吉野、金剛・葛城や三輪の峰々を眺め、神々を感じながら歩く、登拝路としての整備を進めていきたいなあ。と考えています。

2009.07.11 T.I.